

# 日帝の植民地支配と全南羅州地域の地方有力者

河 元 鎬

## 序論

韓国は日帝の植民地権力が強い植民地近代を受容して近代社会へと移行していった。植民地支配権力によって強要された植民地近代の裏面には、伝統的な要素が依然として水面下で働いていた。日帝の植民地権力は郷土社会のヘゲモニーを掌握しようとしたが、専一的な支配は不可能であった。地域社会は中央とは違い、相対的に排他性や閉鎖性を持つ空間であったため、植民地近代のヘゲモニーがそのまま貫徹されにくかった。三・一運動を経て、1920年代以後、郷土の支配エリートを植民地権力と地域民の媒介者にしたあげる政策に変更されたのもこのためであった。

農村エリートは植民地権力の意志を伝達するものであり、かつ同時に民族意識を保つことが可能であるという両面性を持っていたと評価される<sup>1</sup>。ところが、この両面性の裏には地域社会における政治的ヘゲモニーがあった。現実の権力者である植民地政府は否定できなかったが、自らの社会的および経済的基盤である地域民からも絶対に乖離できない歴史的な条件が背景にあった。農村エリートである「地方有力者」は必ずしも植民地権力が創り出したわけではなかった。ほとんどの場合、伝統社会において社会・経済的に支配的な位置にいた集団が、植民地権力との妥協や拮抗といった二重性を示しながら、植民地支配の下で支配エリートとして登場したのである。これに関する研究は、収奪と抵抗といった単純な二分法を乗り越え、植民地近代の内面を照射し得る重要な糸口を示すことができるだろう。

とりわけ本研究では、全羅南道の羅州地域の事例を通して、日帝の植民地支配期における地方有力者の存在形態を明らかにし、植民地近代の内面に横たわる伝統的な要素と農村エリートの対応を探ることとする。

この点を解明するにあたり、全羅南道の羅州地域は極めてふさわしい条件を備えている。①羅州地域は韓国の代表的な平野地帯で班村が散在し、郷吏たちの勢力が強かったということもあり、伝統的な要素を豊富に持つ地域である。②開港後、開港場となった木浦の背後農業地帯にあたり、栄山浦などの浦口は物産の集散機能を備え、民乱や東学農民戦争、義兵抗争などとの関連からも注目すべき動きを見せた地域である。③「合邦」の前後に日本人の移住が盛になると、湖南線の開通（1914年）、道路の建設、市街地および市場の

1 松本武祝「研究史の整理と課題提示」『朝鮮農村社会の〈植民地近代〉経験』（社会評論社、2005年）参照。